

二人の盲人をいやす

聖書 マタイによる福音書第20章29～34節 讃美歌 472 463

説教 森田幸男牧師

今お読みいたしましたすぐ後を見ますと21章が始まりますが見出しに“エルサレムに迎えられる”とあります。イエス様の生涯の最後の週がはじまるのです。ということは今日の箇所は時期的にはイエス様が十字架にかかれるその直前の出来事ということになります。つまり主イエスはエルサレムに迎えられて、そしてその週の金曜日、過越祭の最中でキリストは十字架につけられるということになります。21章から25章まではイエス様の説教集です。イエス様の色々な教えが並んでおりますので、御受難の事は大分先のような感じはしますけれども、日時的には今日の箇所はイエス様の十字架の死の一週間かそこらの前の出来事となります。正に死期が迫っているという中での出来事であります。

日本では癌の告知率というのは欧米に比べるとまだまだ低いです。近頃は大分上がってきていますが、それにしてもまだ低いのであります。癌も一つの病気ですが、「癌の告知」という言い方は普通とは少し違うわけです。どんな病気でも、自分はどこが悪いのかということを経験して診立ててもらって、言ってもらって治療を受けるのですが、癌という病気については特に告知するかしないかが大きな問題になります。癌も初期で治療すれば治るという時は病名を知らせるのですが、その癌が大分進行していて命に関わる状態になっている場合に告知云々ということになります。前にもご紹介しましたアメリカの精神科医のエリザベス・キューブラー・ロスは、「告知するかしないかの問題はあるけれども、患者本人は、自分の寿命については、告知されてもされなくても正確に知っている。寿命があと一週間なのか三月なのか一年は持つのか、それは本人が知っています」というふうに言っています。それは大人も幼児も含めて沢山の人の看取ってきて、データに基づいてそう言っているわけです。

今日の箇所であります、キリストは御自分の終わりが接近していることをよく自覚しておられました。それは前々回読んだところでも、“イエス、三度死と復活を予告する”(17節)ということで、節目、節目のところ御自分の死と復活について語られ、語られ、その道を進めておられるわけです。そして、20章28節では、「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げ

るために来た」とおっしゃって、エリコからエルサレムに向かい、今真っ直ぐに歩んでおられるということでもありますから、この週・過越祭の、犠牲の子羊がほふられるその時に自分の終わりの時が重なるということ、イエス様は自覚しつつ歩んでおられるのであります。

そのような行程の中で今日の出来事であります。「一行がエリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った」とあります。十二人の弟子をはじめとして、ガリラヤから付き従って来た婦人たちもいたでしょうし、そしてそれはもっと大きく膨らんで「大勢の群衆」という表現になるような群れになっていたわけです。その人たちがイエス様に従っていました。そのとき、二人の盲人が道端に座って物乞いをしていたのです。そして聞き耳を立てて、いつもとは違う空気を感じて、「誰がお通りですか」と聞いたのでありましょうが、それがイエス様だということを知って、この二人は「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫びだしたのであります。それは余程大声であったと思われまゝ。すると群衆はこの二人を叱りつけて黙らせようとした。するとこの二人はますます声を張り上げて、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだのです。しますとイエス様は立ち止まって二人を呼ばれ、「何をしてほしいのか」と聞かれます。二人は「主よ、眼を開けていただきたいのです」と言いました。イエス様は深く憐れんで、その眼に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになって、イエス様に従って行った。こういうことでもあります。

「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」というこのところを、最近時々ご紹介しますカトリックの本田神父はこう訳しております。「主よ、ダビデの申し子よ、わたしらの苦しみを分かってくれ」と。この「ダビデの子」という言い方は、イスラエルの人たちが自分たちを外国の支配から解放してくれるそういう指導者、政治的な救い主を「ダビデの子」と呼び、そういうことを期待して待っていたのです。イエス様の中にその「ダビデの子」を認めただけです。「わたしたちを憐れんでください」というのを、「われらの苦しみを分かってくれ」と言うのは、意識というよりは直訳と言った方がいいのかもしれませんが、こういう訳になっています。ところがイエス様に従っていた群衆は、それを叱りつけて黙らせようとしたということです。

ここを読んでおられますと、イエス様は自分の最後の時がもうそこに迫っている中におられるのですが、この二人の叫びを聞き止められたのであります。勿論、群衆もそれを聞いたのですが、聞いていても聞いていない。見ていても見えていない。そういうことは私たちの人生ではよくあります。しかしイエス様はそのような緊迫した中にあってもこの二人の盲人の叫び、苦しむ者の叫びを聞き漏らされる方ではなかった、ということをごくここにすることが出来ます。私たちは自分の関心事に捕われている時は

人の言うことは不思議に聞こえないものですね。また、物事を自分中心に考えている場合には、人の言うことを聞こうとしませんね。そのことは群衆たちが二人を黙らせようとしたこと、しかも、叱りつけて黙らせようとしたことの中によく表れています。この群衆は、ただの物珍しさだけでなく、イエス様に従おうとした人たちでありました。「従う」というのは「同じ道を行く」という言葉です。そこから「運命を共にする」という意味も出てくる非常に大事な言葉です。そのようにイエス様に従っている人たちが、この二人の叫びを邪魔な、とんでもない事として叱りつけたわけです。そういうことによって、彼らはイエス様に従っている人々でありますけれども、この二人の叫びをイエス様が聞かれるのではまるで正反対の事として聞いたということでもあります。

先ほど紹介しました本田神父の訳は、「わたしらの苦しみを分かってくれ」という言い方になっていたでしょうか。ここは訳すのが難しいところですが、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちの苦しみを分かってください。」表現はともかく、これは二人の盲人のこれまでの人生を集約した訴えだと思えます。ところがイエス様に従う人も、この二人のそういう人生、これまでの歩みとその集約的な叫びに込められた思いは聞こえないのです。聞くことが出来ない。こういうことで、同じイエス様に従うと言っても、従っているつもりかもしれないけれど、全然そうでないということがいくらかあるということです。この二人も見えるようにしていただいた後、イエス様に従いました。こういう事がありましたけれども、なお大勢の群衆がいてイエス様に従いました。この二人は最後から従って行ったかと思えますけれども、同じ「従う」でもその中身が全く違うということがあるのだということを、ここを読んでほしいと思います。

しかし、ここを読んでおきますと、私たちの主は、神様は、私たちの祈り、願いをどういう状況であっても聞き漏らされる方ではないことを知らされます。だから私たちは本当に自分たちの祈り、願いを主に申し上げて、それがむなしく聞き流されることは決してないのだということを確認してよいのであります。

それにしても、イエス様はこの二人にも「何をしてほしいのか」と聞かれました。これは前回に出ておりましたゼベダイの息子たち、ヤコブとヨハネが母親と一緒に従ってイエス様に願い事をしたその時も、イエス様は「何が望みか」と問うておられます(21節)。「イエス様が王座にお着きになったとき、この私の息子二人を右と左においでください」と願ったということが出ておりました。22節を見ると、イエス様は「あなたがたは、自分が何を願っているか分かっていない」とおっしゃいました。その同じ問いをイエス様はこの二人の盲人にもされました。「何をしてほしいのか」と。この

二人は、「目を開けていただきたいのです」とこういうふうに願い出ました。この人たちは物乞いだったのです。そうなったのは目が不自由だったことが原因ですが、そういう身が元に戻るということはおの昔に諦めて、何とかして生きてきた二人でした。しかしここでの二人の願いは大きいのです。「主よ、目を開けていただきたいのです。」彼らの願いを聞いていると、私たちの神様に対する、イエス様に対する、信頼とか求めというのはちっぽけなような気がいたします。それだけでなく、イエス様は先ほど、十二弟子の二人ヤコブとヨハネに「あなたがたは自分が何を願っているのか分かっていない」とおっしゃいましたけれども、この二人の盲人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と言っているのです。

私たちも「見えるようになることです」というこの祈り願いを本当にしなければならぬのではないのでしょうか。そういう二人の願いを叱りつけて黙らせようとした弟子たちをはじめ大勢の群衆は、見えているつもりでした。“自分たちはイエス様に従って行く。お前たちは邪魔だ”ということです。ところがこの二人の「見えるようにしてください」と願うこのところに、彼らの解き放たれることを必死に求める、人間として無くてならない根源的な願いをしていることがうかがえるのです。

そういう意味で私たちはここを読んでいて思うことは、イエス様は、私達の心の底から発する叫びは、どんな状況であってもこれを聞き漏らされる方ではない、受け止めてくださる方なのだということを知らされると共に、本当に私たちは求めるべきものを求めているのか、本当に神を信じ、キリストを信頼して一番切なる願いをしているのか。もう何十年もこの状態で、今更そういうことを願ってみてもだめだと諦めたくなくなるようなこともいくらもありますが、それでも、「見えるようにしてください」と、そういう途轍もない、しかし本当に必要な祈り、願いをキリストは聞いてくださる。そうでなければ、私たちも見えているつもりで、本当にイエス様を信じ、従っているつもりで、イエス様と同じ道を行くということではなくて、まるで見当違いな大勢に流されて歩んでいるに過ぎないということになる。しかしイエス様はこの二人の叫びを聞かれる方です。私たちも、こういう痛み、苦しみに閉ざされているそういう人の叫びが聞こえるようになる、その姿がはっきり見えるようになる、そのことを私たちも自分のこととして求めていかなければならぬのではないかと思います。

お祈りいたします。

神様。あなたが私たちの祈り、願い、叫びを聞いてくださるお方であることを新たに覚えて感謝いたします。 本当にあなたを信じ、求めるべきものを求め、そして望みを失わず歩む者としてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前におささげいたします。アーメン